

大学教育開発センター通信

2002年12月17日発行

第 2 号

龍谷大学 大学教育開発センター

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

TEL (075)645-2163

FAX (075)645-2190



CONTENTS

1. 教育改革をおたずねして	
- 「仏教の思想」の場合 -	2
: 教学部長	内藤 知康
大学教育開発センター長	田中 昌人
2. 教員の声	
語学学習におけるコンピュータの有用性	8
: 国際文化学部助教授	N.M. Terhune
授業の中での映像資料の利用	9
: 国際文化学部助教授	松居 竜五
大学教育開発センターへの期待	10
: 短期大学部講師	川崎 昭博
3. センター活動状況	
(1) 高大連携すばるプロジェクト	11
(2) FDサロン	13
(3) 2002年度 教員対象コンピュータ講習会報告	14
(4) マークリーダー設置について	14
4. シンポジウム報告	15
5. 資料一覧	17
6. センター活動記録(2002年7月～2002年12月)	24
7. 編集後記	24



教育改革をおたずねして - 「仏教の思想」の場合 -

教学部長 内藤 知康
大学教育開発センター長 田中 昌人

世界の各地で21世紀における大学教育の新しい試みが始まっています。この欄では、大学内の各分野、また国内外の大学における試みについておたずねし、おうかがいしたことを紙面を通じて多くの方にお知らせしたいと思えます。それを一つの参考にしていただくと共に、読者の皆様からのご意見もお寄せ頂けるようになることを願っております。

第1回目は、本学の教学部長であると共に、「仏教の思想」を担当しておられる内藤知康先生にお話をうかがいました。今回の聞き手は本学大学教育開発センター長の田中昌人です。

必修科目「仏教の思想」が設けられた理由、目的、経過

田中 現在、龍谷大学は3学舎8学部、つまり大宮学舎に文学部、深草学舎に経済、経営、法、短期大学部、滋賀県の瀬田学舎に理工、社会、国際文化の各学部合計約19,000人の学生を擁する総合大学として、カリキュラムに全学共通の必修科目として「仏教の思想」を設けているという特色を持っています。最初に、その理由、目的についてお話いただけますでしょうか。

内藤 龍谷大学は1639年の創設ですから、2002年で創立363年を迎えます。親鸞聖人を開祖とする浄土真宗の教えを建学の精神としています。その根本には「一切の人間が等しく真実心を与えられているという精神」があります。それを受けて、本学は大学教育の目的を「真の人間たるにふさわしい世界を開くことを目指して、深い学識と教養を持ちながら、国際社会の一員として努力する人間を育成する」ことにおいています。



内藤教学部長 そのため「仏教の思想」という授業科目を設けて「龍谷大学のよき伝統を知り、仏教の思想を学ぶことを通じて自己を振り返り、幅広いものの見方と、心の豊かさを育てよう」としています。この授業を通じて、学生諸君が自己と現実世界を見つめることができる時間が用意されていると言っても良いでしょう。

田中 「仏教の思想」(4単位)となったのは、2001年度入学生からでした。それまでの経緯と、今回カリキュラム上で改革された点を教えていただけでしょうか。

内藤 新制大学になった当初は仏教を専門とする大学でしたので、2年間必修8単位でした。総合大学となってからは全学部生必修の「仏教学」(4単位)となっていました。こうして歴史的に蓄積されてきた内容が基本となっています。一方で本学文学部には仏教学科があり、そこで開講されている専門科目としての仏教学関係の科目とは位置づけや内容が異なります。カリキュラム上、それらの科目との区別をはっきりさせ、必修科目にふさわしい名称をつけ、内容の検討を行なう必要がありました。

そこで大学執行部の決定によって検討委員会が設けられ、2年に及ぶ検討の結果、科目名称を「仏教の思想」と改め、カリキュラムへの位置づけも「仏教の思想A」(2単位)と、「仏教の思想B」(2単位)として、前者を1年生の前期、後者を1年生の後期に位置づけることが全学的に統一されました。

「仏教の思想A」と「仏教の思想B」の教育目標

田中 昨年から新しくなりました「仏教の思想A」と「仏教の思想B」の教育目標とそれぞれの授業計画についてお話しただけですでしょうか。まず教育目標についてお願いします。

内藤 これは「仏教の思想」教育内容検討委員会で検討されました。

先生方の豊かな経験の交流と議論をもとに、「全学必修」という性格と、「基礎」と「応用」という教育内容に関して求められる事項に留意して「仏教の思想」の教育目標を7つにまとめました。それを、2002年度のシラバスには次のように載せてあります。



田中センター長

2002年度 龍谷大学 「仏教の思想A・B」シラバスより

1. 人間にとっての宗教の意義を明らかにする。真実の宗教を見極める眼を育てる。

真実の宗教は、その思想と文化を通して、人間に二つの働きをもっている。一つは、自己の存在意味や人生の根本的な方向性を指し示すという働きである。もう一つは、日々の生活の中で直面する苦しみや悲しみを乗り越えさせるという働きである。仏教はこの二つの働きをもって、自己中心的に生きようとする人間が、あるべき理想の人間に向かって、脱皮、成長していくことをめざしている。

2. 倫理・歴史として「仏教の思想」を学ぶ。

仏教は一つの学問である。高校では、公民科「倫理」や地歴科「世界史」「日本史」の教科で、仏教を学習する。それを踏まえ、「仏教の思想」の教育目標に、次の点を掲げる。

青年期における人間が、自ら歩んできた道・人生をあらためて見つめ直し、人間として生きる意味を考える。

学生が過去の人々の思想や生き方を学び、また現代社会の諸問題を考えることを通して、人間としての生きる意味や目的を探求する。

仏教は、人類が継承してきた一つの智慧であり、世界の各地で、人々の心の依りどころとなっている。この歴史を学ぶことを通して、ものの見方を豊かにし、人生への思索を深める。

3. 人間学として「仏教の思想」を学ぶ。

宗教は民族宗教と世界宗教に大きく分類されるが、世界宗教としての仏教の特質には次のような点があげられる。

- ・創造主なる神を想定しない。
- ・人間を含むあらゆるいのちに重きを置く。

仏教がめざしたのは生きとし生けるものの幸せ・平等・平和である。講義を通して自己を内省し、悲しみや苦しみに立ち向かう勇気と、他者に対する慈愛と感謝と寛容さを培う。

4. 広い視野を育てるために「仏教の思想」を学ぶ。

一つの固定的なものの見方を離れ、柔軟で、幅広い考え方や生き方が開かれるように「仏教の思想」を学ぶ。

5. 現代世界のあり方を考える思想として「仏教の思想」を学ぶ。

戦争・差別・貧困・犯罪など、世界の各地で現実に起きている問題と向きあい、どのように解決したらよいかについて考える。

6. いのちのかけがえのなさに目覚め、異なる意見と対話・交流しあえるような姿勢を培うために、「仏教の思想」を学ぶ。

いのちに関わる現代の諸問題 生命倫理や地球環境などを積極的に見つめる。仏教は、一つひとつの存在が無限の意味と尊さをもって輝いていると伝えてきた。さまざまな執着や偏見をとりはらい、相手の幸せを願い、相手の痛みをともに分かちあおうとする共感を養う。

7. 「仏教の思想」を通して、龍谷大学の建学の精神を学ぶ。

龍谷大学は、シルクロードコレクションなどの世界的に貴重な古典籍を有する大学である。1639年創設以来からの、龍谷大学の仏教の先進性と歴史的伝統を、建学の精神を学ぶことを通して理解し、龍谷大学を愛する学生を育てる。

「仏教の思想A」と「仏教の思想B」の授業計画

田中 授業計画としてはどのようにお進めになるのでしょうか。

内藤 各ご担当の先生方の持ち味を出していただくことにはなりますが、いわゆる講話ではなく、大学における初年次教育「仏教の思想」の授業ですので、共通のエッセンスを持つようにしています。それを授業計画全体に盛り込みながら、教師からの一方的な講義にならないよう、学生一人ひとりの声に耳を傾け、視聴覚教材も活用して講義を展開します。

「仏教の思想A」は釈尊の生涯と思想を中心にしていますが、地下鉄サリン事件等、宗教がらみで世間をさわがせている出来事もおこっていますので、正しい宗教観を持ってもらえるようにという願いをこめて、宗教の持つ意義や様々な宗教形態についての考察も取りあげています。具体的には、授業に盛り込むべき内容として以下の項目を挙げています。

2002年度 龍谷大学 「仏教の思想A」シラバスより

1. 人間と宗教 カルトや原理主義・宗教の意義
2. 神々と仏 民族宗教・世界宗教（キリスト教・イスラム教・仏教）
3. あるがままに見る眼 智慧・如実知見・四諦・三法印
4. いのちあるものすべてへの慈愛 慈悲・非暴力
5. 自己中心的に考える人間存在 煩悩・我執・四苦八苦
6. 支えあってつながっている宇宙 縁起の理法・空・無我
7. 仏教の思想と龍谷大学の建学の精神

内藤 また、「仏教の思想B」は親鸞の生涯と思想を中心にしていますが、日本人的な心情にフィットした仏教という観点から、浄土教関係のみならず道元や日蓮の思想にも触れ、日本仏教の特質を理解してもらえるようにしています。具体的には、授業に盛り込むべき内容として以下の項目を挙げています。

2002年度 龍谷大学 「仏教の思想B」シラバスより

1. 鎌倉仏教の位置と特質 法然・親鸞・道元・日蓮・一遍
2. 真実の探求 老少善悪を問わず・易行・わけへだてのない安らぎの道
3. 自己を徹底的に見つめる 悪人正機・煩悩具足の凡夫・罪悪深重
4. 現実世界への擬視と安らぎへの願い 火宅無常の世界・欣求浄土・世のなか安穏なれ
5. あるがまま受け容れられる世界 摂取不捨・阿弥陀仏の本願・自力と他力
6. あらゆるものは輝いている 白色白光・御同朋御同行・他者の尊重
7. 親鸞の思想と龍谷大学の建学の精神

田中 初年次の必修科目ですから、しかも日本の場合、高校までの宗教教育が必ずしも系統的に行なわれているとは言えませんし、一般社会の宗教に対する受け止め方も、必ずしも成熟していないかもしれませんので、教育上のいろいろな工夫が必要だと思いますが。

内藤 若手の教員が情熱と意欲を持って、それだけでなく教育的見識と人格を打ち込んでいただけるように、またベテランの先生も最近の大学生の意識の変化を据えて、仮にもマンネリズムにならないように、いわば人生のかけがえのない出会いの場として臨めるように心掛けています。



そのために、まだテキストを使ったりするのではなく、生身の教育的人間として、教員と学生が学びあい、その実践を交流して、今で言う自己評価、相互評価をしながら更に良い教育内容と教育方法が作られていくようにしようと、その過程を大切にしています。その努力を抜きにしてテキストを導入するのではなく、その努力が教育遺産となり、テキストも作られていくようになる道を探ろうとしています。

もちろんそのためには、教員も学生も各自の体験が大切にされ、そこにはかけがえのない成果が含まれているものとして、自己開発されていくことが大切ですし、その点から学生を支援するために視聴覚教材を用いたり、各種の著作物を紹介しています。

幸い、本学はもちろん、京都は仏教文化や思想を歴史的に育てて来た世界文化遺産の地として、それが今に脈打っていますからできるだけそれを教育的風土として生かすようにしたいと思っています。

あと、もう一言付け加えさせていただくならば、科目として開講しているものは、基本的には「学」だということであります。そこは、お話や感想を述べる場ではなく、一つは事実を踏まえて述べることと、もう一つは解釈の妥当性というものがあ程度説得力のあるような方法論であるということでないといけません。一般的な仏教についての話というだけならば、寺院などで法座といった形で行なわれていますが、それは一面仏教に対してどのような思いを持っているのかということが中心になってきます。大学で開講されている授業ですから教員の思いだけが先走らないように、ただ内容から言って思いがゼロでも困る訳です。ですから思いが全面に出ないようにということは担当者として自戒しておりますし、これは私一人の問題ではなく、担当者の共通理解としてしているところです。

田中 初年次教育の後、各専門へ進んでいくわけですが専門を学ぶことによって、そこから求められる高度な一般教育を身につけることと、それを生かす点でさらに他の専攻

でも仏教の思想について発展、深化したものを学びたいということが出てくると思うのですが、そのような場合に対してどのようなものが準備されているのでしょうか。

内藤

まず、大学のカリキュラムについていうならば、現在のところ必修という形でおけるのは4単位が限度だと思います。しかし、選択科目として「歎異抄の思想A・B」という科目を共同開講科目として開講しています。その他に仏教文化についての科目や、仏教の歴史についての科目がいくつかあります。私の経験でいいますと、受講生に聞くと「仏教の思想A・B」で学んだ上にさらに勉強してみたいといった学生は多いです。ね。「歎異抄の思想A・B」などは大変人気があり、現在はそれぞれ2コマずつ設けています。毎年1,000人以上が受講という現状なので、さらに考えていかなければいけないと思っています。社会人として学びにきてくださる方もあります。その他一般の方には、市民に開放された龍谷講座の中で仏教に関するものが開かれています。

ものの見方というものは人間なら当然変化しますが、同じことであっても、聞く側の置かれた立場によって、聞き方が違ってくるのです。20歳の時に感激したことが40歳代、50歳代になったときに、もっと深い味わいを汲み取ることができるようになりますので、大学側がそれに対して内容や材料をさらに用意できていかなければならないと思っています。

龍谷大学には学際的な研究拠点としてさらに2002年度に人間・科学・宗教総合研究センターができ、その中にオープンリサーチセンターとして「仏教生命観に基づく人間科学の総合研究」が設けられています。また将来的には博物館の構想も探られているわけですが、そのような条件が教育改革を支えてくれることを願っています。

田中

21世紀は、国際連合からも「平和と非暴力の時代」をつくっていくことが呼びかけられています。これは仏教の思想の目指しているものでもあると思います。こうした呼びかけに応えていく道のひとつとしても、龍谷大学で学ばれた方がたが各専門を十分修められるとともに、「仏教の思想」で学んだ生き方をもって時代に貢献できるようになってくださることを心から願っております。ありがとうございました。

(文責：大学教育開発センター)





語学学習におけるコンピュータの有用性

国際文化学部助教授 N. M. Terhune

教育テクノロジーの分野では、授業におけるコンピュータ使用の有用性を検証する研究を行って来た。授業におけるコンピュータの使用が学習効果を高めるのに貢献しないという研究結果も報告されているが(Economist, Oct. 26, 2002), 教育テクノロジー分野でのこれらの研究では貢献するとされている。

教育テクノロジーの研究者達は、コンピュータを使用する言語学習の授業において、コンピュータで作製した練習問題やビデオ、インターネット、オーディオカセットテープなどのテクノロジー機器の使用が極めて有効であることを確認している。また、同じ教材を使いながら、テクノロジー機器を用いるグループと従来通りの学習方法を用いるグループを分け、その違いを分析している。短期間の実験分析ではハイテクノロジー(コンピュータ)を使用する学生とローテクノロジー(オーディオカセットやペーパー)を使用する学生の成績に有意な差はなかったものの、差があることは認められている。3か月間にわたって行われたテストでは、コンピュータの使用者の方がよい成果をあげている。成績以上に大切なことは、コンピュータを使用した学生が英語に対する自信をつけたということである。コンピュータを使用した学生は英語の聞き取りがよくなったと感じている。何を学習するについても、特に言語学習においては、やる気を持つことと自信を持つことが最終的にその学習に成功するかどうか大きな影響を与えることは言うまでもない。

本研究はテクノロジーの授業への貢献を再確認するものであり、将来の授業におけるテクノロジーの実用的な活用を示唆している。具体的には、語学授業におけるオンラインビデオ教材やコンピュータを使用した文化に基づく言語学習とコンピュータを使用しない学習とを比較した結果を検討している。言語や文化の学習に使用されるA/V教材の理解を助け、促進するようなインターアクティブなA/V言語学習のためのソフトウェアも製作した。このソフトウェアを使用した学習者は、標準テストですぐれた成績をあげたこととコンピュータを使用しなかった学生に比べ自分達の学習経験を高く評価していることで、コンピュータを使用した学習方法がすぐれたものであることを実証することができた。

授業の中での映像資料の利用

国際文化学部助教授 松居 竜五

私が大学で比較文化関連の授業を担当するようになったのは 1990 年代の初めで、もう学内の多くの教室にビデオの設備が備わっていた。その後、自分自身の留学を挟んで 1997 年から埼玉県私立の私立大学で教え始め、昨年から本学の国際文化学部に来ている。その間、文化間の問題を扱う授業の中で、ビデオ他の映像資料をどのように授業の中で用いるか、試行錯誤の連続である。

授業計画を立てるのに四苦八苦だった最初の年あたりは、関連のビデオを 1 本持っていけば何とかなるだろうと思っていた。だがこれは当たりはずれがかなり激しかった。とりわけ使えなかったのが、教育用に作られたビデオ教材である。授業で使いやすいように 20 分くらいで一つのトピックがまとめられているのだが、平板な映像と語り、時代遅れな構成で、私の目から見てもずいぶん退屈なものが多かった。やはり、しかるべき資本が投下され、多くの人の目に晒され、作り手も力を入れた TV 番組や映画には、インパクトの上で全然かなわないのである。もちろん、そうした商業媒体の場合には偏向という問題がついて回るが、これは教師の側が話の流れをコントロールすることで何とかなる。

その TV・映画作品の使い方であるが、経験から言ってこれらを参考資料として映像を使う場合、10 分間を超えると授業の中での文脈に合わせにくくなるので、ある程度短く編集して持っていくことになる。しかし、膨大なリソースの中から授業に合うものを見つけて来るのは大変である。それでも、うまくはまったときには学生の関心を引きつけるために大いに役立った。たとえば、比較文化の教材として海外の報道などは格好の材料で、BBC や韓国の TV の日本報道などは、学生も新鮮な驚きで見ている。こうなるとしめたもので、それぞれの報道にある歴史的背景へと話が持って行きやすくなる。

最近では、自分自身が小型のハンディビデオで撮影した映像を使う機会も多い。南アフリカの学会の際に、会議を抜け出して撮って来た人びとの生の声などは、今でもいくつかの授業で重宝している。アパルトヘイトとその終焉に関する白人、先住民双方の率直な見方や、意外に強く残るボーア戦争の記憶などは、日英の比較研究に関する授業の資料として都合がよかった。また、韓国やヨーロッパに行って拾ってきた歴史問題、サブカルチャーに関連する日本観を語ってもらった映像は、演習などの際に活用している。自分の専門と外れる素人フィールドワークであっても、一定の問題意識に沿って撮ってくれば、結構すぐに授業で使えるものだというのが正直な印象である。

現在の最大の悩みは、ビデオカセットで 1000 本を越えてなお年々増え続ける授業用の映像資料をどのように保存・整理するかということである。従来のビデオ資料はどうしても劣化が進みやすいため、DVD への変換を進めている。今年度の自己応募プロジェクトの予算はこのデジタル化のために使わせていただいた。しかし、本音を言えば、大学内にこうした AV 関連の教材を扱うセンターを作っていただいて、きめ細かい対応でこうした作業を代行していただけないものだろうか。そうすれば、教員はより授業内容の方に専念でき、創意工夫に溢れた映像資料を駆使できるはずだと考えている。

大学教育開発センターへの期待

短期大学部講師 川崎 昭博

私自身は、短期大学部社会福祉科の教員という立場で仕事をしてもうすぐ2年になります。以前、龍谷大学の学生とのかかわりといえば、私が勤めていた福祉の現場への実習や卒業生が職員として配属され一緒に仕事をするといった場面でした。福祉の現場での私自身の龍大生のイメージは「真面目」「おとなしい」「前向き」といった感があります。実習の巡回指導に来られる先生方は学生に対して非常に熱心でしたし、積極的に指導をなされておられました。福祉の現場では多くの学校から実習生を受け入れていましたが、良しにつけ悪しきにつけ学校により学生のカラーがあり、学校においてどのような教育がなされているのかといったことについては、実習に来られる学校の教員も含めて興味ある立場で福祉現場の職員はみていました。今は、立場が変わり、実習生や卒業生を送り出す立場になり、福祉の現場からは学生ともどもみられているわけで、多少の緊張感があります。

私自身は、福祉は実践あってこそその福祉だと考えています。理論や理屈も大切ですが、福祉に対する理念やしっかりとした考え方をもち現場でいい実践すること、そのことが社会をより良い方向に変えていくことにつながります。そういう意味では、卒業生が、社会のなかで、福祉というものに対してしっかりとした理念や考え方をもち、よい実践をして欲しいという期待があります。社会を変えていく若い人材を社会に送り出すという、大学での教育に関わるものとしての社会的責任の重さを感じます。

大学として、社会に送り出すほうの責任としては、何を学んでもらったのか、何が学べたのかといったことが気になります。社会福祉では、福祉実習がありますが、学校で学んでいること、また学んだことを現場で直接実施するという点では、学生が何を学び得ているのかタイムリーに評価することができます。また、それは一方では評価されるということでもあります。実習を終えた後、学生の課題や福祉施設の指導者の方からの貴重な意見や評価を学校教育のなかでどのようにフィードバックしていくかといったことについては、今後の私自身の大きな課題でもあります。

大学を取り巻く環境は非常に厳しく、教育の場としての大学のあり方や真価が問われている時代にあって、教育に対する改善が絶えず求められています。そのあり方については、学生に対する責任として、個々の教員のたゆまぬ努力と研究が求められていることは明らかです。

先日、大学教育開発センターのFDサロンで社会学部の田村先生の授業への取り組みを拝聴させていただいて、非常に勉強になりましたし、私自身授業の中で活用したく思いました。新人の教員としては、先生方が授業のなかでいろいろな試みや工夫をされておられることを学ばせていただく場として、私個人としての課題も含めて、大学教育開発センターに対して大いに期待をしています。



センター活動状況

高大連携すばるプロジェクト

高大連携事業

すばるプロジェクト

はじまる！！

創刊号でも紹介致しました龍谷大学と京都府立商業高等学校との高大連携事業「すばるプロジェクト」がいよいよ9月27日（金）からスタートしました。

この事業は、「共同開講科目特別講義 - は伏見をどう変えるか? - 」として開講され、51名の龍谷大学生と79名の府立高等学校生徒が2003年の7月までの1年間、共に学びます。

第1回から第5回までは合同講義で、講義の前半は、ゼミナールを担当する5名の教員が交代で各ゼミナールに関連した話題で講義を行い、授業の後半では、大学生と高校生が毎回違うグループに分かれ、出された課題に対するディスカッションを行いました。初回ははじめてということもあり、大学生、高校生共にいささか緊張気味でしたが、回を重ねる毎に、ディスカッションも深まりをみせ、お互いの持ち味を出しながら積極的に議論に参加するようになりました。



互いに意見を交換し合う龍谷大学生と府立商業高校生の生徒

大学教育開発センター通信 第2号

「高校生が入ることで雰囲気が新鮮」(龍大生)
「高校生と大学生で発想の違いがあることが判ってよかった」(龍大生)
「高校生のインターネットに対する知識が豊富なことに驚いた」(龍大生)
「90分の講義は長かったけど高校の授業では習えない、いろいろな話が聞けてよかった。」
(府商生)
「大学生と一緒にいろいろなことを考えることができてよかった」(府商生)
「高校生でも興味のもてる内容が多かったのでよかった」(府商生)
等々の感想が聞かれ、概ね合同講義は成功裏に終えることができました。

現在は、下記の4つのゼミナールに分かれ、大学生と高校生が本格的に共同でフィールドワークに取り組みはじめました。「地域社会との共生」を目指して、今後、大学生と高校生が共に学び、活動することにより、大きな成果と地域への貢献が期待されるところです。



フィールドワークを行う伊達ゼミナールの生徒

また、今回のプロジェクトでは、新しい試みとして、高校生と大学生のディスカッションが円滑に行えるようサポートするために、試験的に大学院生、上回生によるDF (Discussion Facilitator) を導入しました。DFから寄せられた貴重な感想や問題提起は今後の授業展開において大切な役割を果たしています。ゼミナールに移ってからはTA (Teaching Assistant) として参加してもらい、各ゼミナールの活動をサポートしています。

大学教育開発センターでは、「すばるプロジェクト」でのこれら新しいサポート体制の試みを通じて、今後の大学の授業改善にもフィードバックをしていきたいと考えております。

【ゼミナール別テーマ】

- | | |
|------------|------------------------------------|
| 佐々木 淳ゼミナール | 「Let ' s Voyage - 伏見の歴史家体験に向けて - 」 |
| 伊達 浩憲ゼミナール | 「地域情報化 - 竜馬通り商店街を事例として - 」 |
| 野間 圭介ゼミナール | 「伏見地域における商業集積と商圈」 |
| 広原 盛明ゼミナール | 「伏見のまちと街並みの行方を考える」 |

FDサロン

創刊号でお知らせいたしました、「センターの事業目的・内容」のうち、「教育活動交流・研修機能」を充実させるために、「交流研修プロジェクト」が大学教育開発センター運営委員会のもとに設置されました。その活動の一つとして、『FDサロン』があげられます。これまで2回開催された内容をお伝えします。

FDサロンとは

教職員の交流の場として、毎回、話題提供者が提供する話題について、お茶を飲みながら、自由に意見交換等が行える機会を積極的に設け、各種の教育活動の経験や意見が話し合えるようにと、10月から毎月開催されることになりました。さまざまなFDの取り組みを理解し、全学にどのように環流していけばよいかを考えることを目的としています。

第1回



話題提供者：田村 公江 先生（社会学部）

開催日時：10月28日（月） 17:30～19:00 深草学舎 大学教育開発センターにて

話題：講義形式の授業を活性化する試み（瀬田学舎共通科目「環境と倫理」から）

内容

講義とグループワークを組み合わせた授業の進行マニュアルを報告。オリエンテーションプリント、ルールブック、進行表を参考資料として配布し、学生が作成したグループワークの記録、入場券、一人新聞のサンプルなどを紹介。

<田村先生から一言>

実際に行う時の細かな質問をたくさんしてもらえたので、具体的な話をすることができました。また、このマニュアルの発展、応用の可能性について色々なヒントをいただきました。

第2回

話題提供者：高橋 進 先生（法学部）

開催日時：11月18日（月） 18:00～20:00 瀬田学舎 6号館小会議室にて

話題：法学部基礎演習における上級生のクラスサポーター導入の成果と課題

内容

「担当したくない科目 1」の教員と「履修してよかった科目 1 or 2」の学生とのギャップをいかにして埋めるか - 学生、教員からのアンケート結果をもとにクラスサポーター導入に至った経過、また、他大学の制度を参考にしながら、龍大法学部方式で導入したクラスサポーターの成果と課題の中間報告。

<高橋先生から一言>

場所が瀬田学舎で、開始時間も日が暮れてからだったので、参加者が少なかった。事前申込を必要としていなくても、ある程度の参加者を確保するための場所と時間の工夫が必要であろう。

これまでの『FDサロン』の資料は大学教育開発センターにあります。ご希望の方はお申し出ください。

『FDサロン』は、事前申込は必要ありません。途中からの参加でも結構です。

興味のある話題の際には、ぜひ足をお運びください。リラックスした雰囲気情報交換しませんか。

2002年度 教員対象コンピュータ講習会報告

日時 : 2002年9月17日(火)2・3・4講時 ワープロ・プレゼンコース
2002年9月18日(水)3・4講時 表計算コース
場所 : 龍谷大学 深草学舎 5号館 情報処理実習室



教員対象コンピュータ研修の様子

去る9月17日・18日にアプリケーションソフトの使用法並びに、コンピュータスキル向上を目的とした、教員対象コンピュータ講習会を実施しました。

1日目にワープロ(Word)・プレゼン(Power Point)コース、2日目に表計算(Excel)コースと、2日間にわたり約20名の方が受講されました。

大学教育開発センターでは、今後もこのような教授法改善に繋がる教員対象の講習会を行っていく予定ですので、ご要望等がありましたら大学教育開発センターまでご連絡下さい。

マークリーダー設置について

2002年10月30日にマークリーダー及び、自動採点・成績管理ソフトウェアの説明会を実施しました。機械は深草学舎・紫英館2階研究サポート室に設置しています。

今年度は、深草学舎のみの使用とさせていただいていますが、今後は利用者の皆様からのご要望等を考慮したいと考えています。

なお、使用に際しましては次の事項にご注意願います。

【注意事項】

マークカードの使用枚数を使用される1週間前までに大学教育開発センター(紫英館1階)までお知らせください。使用日までに準備します。

マークカードは、大学教育開発センターでお渡しします。

使用説明書は、研究サポート室にあります。



シンポジウム報告

慶應義塾大学教養研究センター開所記念シンポジウム報告

教学部教学課長 吉岡 義信

日時 : 2002年9月30日(月) 13:00~
場所 : 慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1階 シンポジウムスペース
演題 : シンポジウム『教養教育をめぐる』
第1部 「教養教育を考える」
第2部 「教養教育グランドデザイン」

秋雨のそば降る9月30日、東急東横線日吉駅に降り立った。目指すは慶應義塾大学来往舎(らいおうしゃ)。ご存じのとおり日吉駅をおりると、慶應義塾大学の日吉キャンパスが眼前に広がっている。その中でもひときわ新しく明るい建物がこの来往舎である。

この来往舎はいわば研究室棟、龍谷大学で言えば深草学舎の紫英館にあたる。ただし、事務スペースはなく、シンポジウムスペースやアナログ書誌データアーカイブ、研究成果発信展示スペースなどがあり、教員の研究のためにある建物といえそうだ。

教養研究センターはこの来往舎における研究活動であり、この中でも特定研究として推進されている「超表象デジタル研究センター」プロジェクトは文部科学省による助成プログラム「学術フロンティア」に選定されている。

さて、今回の目的は教養研究センター開所記念シンポジウムである。

第1部は「教養教育を考える」である。今、なぜ「教養」教育なのか。何を「教養」教育というのか。この命題からこのシンポジウムは始まった。

小沼通二氏(慶應義塾大学名誉教授)は、多様化する世界において、大きな社会変動の中で従来にもまして適切な判断が求められており、これらの問題について知恵と技を身につけていて適切な判断と選択できる人が「教養」ある人とした上で、広く浅い「教養」と、狭い専門ではなく広く深い専門基礎をもつ「教養」をもつ人材を育成することが、大学において教育する教養である、とまとめられた。

新田孝彦氏(北海道大学大学院文学研究科教授)は、北海道大学で行っている教養教育の改善例として、「最良の専門家による最良の非専門教育」の理念のもとに「全学教育科目実施の手引き」を作成し、教養教育の理念と目的・科目のねらいと内容を示したが、残念ながら教員の中にはこの手引きを読まない、理念を理解しない、といった問題があると報告された。

鈴木佑治(慶應義塾大学環境情報学部教授)は、ハーヴァード大学の学問体系を例に、大学においてどのような「教養」をどのように「教育」するかどのようにしたら「教育」できるのかが述べられた。

大学教育開発センター通信 第2号

3氏とも大学における「教養」教育についての理想があり、本来の在学生だけではなく、科目等履修生や“もぐり”の聴講生もが集まりたくなる教育や、生涯学習の一環としての「教養」教育を行うこと、徹底した少人数教育の実践により、学生と教員、学生同士、教員同士が相互に啓発し合う場としての大学づくり、日吉の研究者の人的資産の豊かさ、立地の良さ、周辺コミュニティとの連携といったメリットを利用した「コア教育プログラム」の発信、といった夢が語られた。

3氏の「教養」教育についてのコメントを聞く限りでは、本学京都学舎における「共同開講科目」の在り方は、3氏の理想に限りなく近いものではないかという気がしている。

さて、第2部は「教養教育グランドデザイン」である。この「教養教育グランドデザイン」は、慶應義塾大学教養教育研究会が文部科学省からの委託研究として大学における新たな教養教育モデルの構築を目的に調査・研究が行われ、この作業をまとめた報告書である。この「教養教育グランドデザイン」については、大学教育開発センターで保存しているので、直接手にとってご覧いただくこととして、内容は省略させていただく。また、次のホームページにおいても公開されている。<http://www.keiou-up.co.jp/edu/la/>

このシンポジウムに参加し、本学と慶應義塾の差は何であるのか、あらためて考えさせられた。

1. このセンターの構想は、「教育＝研究」にあると思われる。本学においては、2001年度から「大学教育開発センター」が設置され、教授法についての開発もより積極的に行うようになってきているが、「研究部」とのより密接な連携を考えていかないと、慶応には追いつけない。
2. シンポジウム第2部の「教養教育グランドデザイン」については、文部科学省がこのたび示した「特色ある大学教育支援プログラム」を先取りして行っているものと思われる。本学においても、文部科学省の行う支援について、早くから情報を取り入れ、取り組み体制を作らなければならない。

